特115
891

道乃記

始

サラタ紙ハ面白カラズ
和紙ハ薄葉ヲ用フベキナ

特115
891
帝國圖書館藏

正三位丹羽長國公小影
(明治三六年一一月七〇歳)

大正
6. 9. 21
内交

付紙モイレナイ
私紙ヲ簡単ニキキ〇

正三位丹羽長國公夫人久子小影

（明治三一年四月六三歳）

たちぬ ちとせ経 ふく風 のおと
安達ちは山裏
花のいろ 散りし あはれなる
色よりも外に 安達
名てはなし 身の山

中邨今子

蓑塚の夜雨

むかしより
名の世てふ 蓑塚に
いまさらしぶ 夜半に降雨ぞふれ

岩ヶ峯の秋月

久方のあまねき
三更の月 影
あのまゝ 照らす
岩ヶ峯 の 松のえ 乃

観世寺の晩鐘

立のぼる夢の
たゝまどろれいつる
うき山 つあひの
てらす 鐘

阿武隈川の帰帆

夕暮の汐 あふくま
舟も歸ての 河をかき
ともにいま いつり

高田落雁

峯あまた 越えきや 遥かに
らえて高田よ 落る
夕まくれ 雁

上嶋ヶ岡の晴嵐

ふきされて 中ふ日
空ふく峯の 嵐に
すゝむき色の峯

霞城の夕照

夕映の月
さしのて利ふ 色こえて
なかめ たそ 影 めさ

安達太良山の暮雪

暮ゆく 雪
色より外 あつもる
きてと 安達
しなる 山

道の記

辰といふ歳の卯月末の頃より世の中おだやかならず。白河てふ所まで敵のおしよせて合戰あまたゝびあり。仙臺公始め諸家のつはもの力をあはせて防ぎ戰へども敵はなかなかに強きよし聞えけるに。わが公には五月末の頃より御身例ならず。また五郎のきみも水無月初の四日頃より一かたならぬ病のおこりて三度のものさへも好ましからずと聞侍る。我公例ならず、まします折から五郎の君の殊にいさましうものしたまふべきに。かく病に臥し給へばみづからはじめ誰も心くるしう思ひけるに。同月の十日頃よりはいとたの

みがたうなりて。神佛にちかへる甲斐もなう中の六日の夜あだし野の草葉における露よりもいとぞはかなく消ゑ給ひける。播州とかいふ所なる親君はらからの聞かせ給はゞ。いかばかりか歎き給はめと。涙の川のかへりもやらぬ面かげを朝な夕なに偲ぶ間さへに世の中いよゝおだやかならず。文月末の七日にいたり。朝まだき敵のおしよせなむも難斗とて人々打語らうも心ならず思ひしに。亥の刻過る頃ともおぼしきに。やすみ侍らむとて閨に入りしばしまどろむほどしもあれ。奥田のとみの事にて自らに逢はねばならずと聞えしかば。いそぎおき出でつゝ逢ひしに敵はやおしよせ來むにいそぎ立のき給へとなり。むねさへいとゞとゞろき

つゝ今ははやせむかたもなう思はれぬ。

みね子、きく子、くみ子らはいと心地よげにいねたるに。人々のさはぎ立ける聲に目覺めつゝ何事やらむと思ひけむ。起き出でうち驚くさま何こいはむも唯むねのみふたがり。菓子などあたふるに常ならずとや思ひけむかたはらの人の背にのみつきそふもあはれなり。

子の刻過に供も揃ひぬとて名殘をしうも住なれしやかたをすてゝ夜すがらに出で行く。三年あと御二親君のすみ給ひにし宮下てふ所のやかたにしばしやすらひ給ひて、母君妹君諸共にこそとて立寄りしに。此處へは寄り給はずと聞けば。しばしいこひて又輿に打乘り。水原といふ所にいそぎ

むかふ。

峯子には何とせしか道すがらもとかく泣入り。をさな心の一すぢに家路のみ戀しみむつかり給ひて。つきそふ人々の心をくるしめぬ。晝ならばしばし慰むながめもあらむに。秋の夜のしのゝめ近く風いとひやゝかなるに。霧さへ立ちこめたれば猶さら物がなしう思はれぬ。寅の刻にもなりぬらむ鐘の音ほのかに聞えて吉倉とかやいふなる村を過ぎ。曉つぐる村鴉のねぐらを出るを見るにつけ二たもとの松のやかたのなつかしく。行衛はいとゞ白河の關さへ今は恨めしくやう／＼水原につき侍れば。母君始めはや待たせ給ひておはしましければぬかづきつゝ。夜すがらちゞに御心をつくし給ひぬれば。なやましうおはし給はむかと見まゐらするに。なか／＼御年に似ずみ心さへはれやかにわたらせ給ひてさま／＼の御物語あり。

ふたもとの松のやかたを夜すがらに
あとに見なしてゆくぞかなしき

水原にて朝饋したゝめけるははや日も高う辰の刻過ぎにも成けむに。何かは物さわがしうやがて智翫温齋といひける人の出で來て。二もとも今は限りと聞ゆれば庭坂てふ處までいそぎ給へとなり。母君始めみなうちむれ立出るいとゞ哀なり。

秋の日なればみじかくて早や程もなう午の刻にも成侍れ

ば大森とかいふ所のいと狭き宿に着き侍りて午餐などしたゝめしに。をさな子らの夜すがら歩みけるまゝ疲れはてけむいと心地よげにやすみけれど。其にぎはしきこと何といはむかたも無きにはや目をさましぬるに菓子などほしうもなり給ひなむと思へど。飯さへ中々に出て侍らでいとさわがしき中といひ。母君のをさなごなどうるさがり給はむかと。わきまへなきものゝ心の中を思ひやり。ひとり心をいたむる程しも。我公には二もと松を立出この處まで程なう着かせ給ふべきよし聞えて。母ぎみ始めいそぎ出ましぬ。

いと暑う。夜すがら來しみちなれば。人みな疲れはてたれど。是より庭坂といふ所まで行くとて寅の刻過ぎ侍る頃。

洲川といへるところにかはらの有り此處に渡場もありければ渡らむとするに。舟とてはなくて水の音のみいとたかく。輿のうちより見るさへおそろしきに。かたはらの人々は皆あゆみてぞこゆる。峯子らはかごだにしばしも好まねばいかにせましやと思ひわづらひて行き過るに。又も渡しの在りて日もはや暮るゝばかりなるに。たゞ一すぢの丸木橋ありて輿にてかよひかぬるをやう〳〵に渡りぬ。心々に神佛のみたすけをいのりぬるみかげにや。皆人々さはりもなくてうちこえける。

日もはや西に入りそむるに。みちすがら宿やいづくぞと問へば。今宵は清水寺といふ寺に着かなむといふ。いそぎ

はべらむにも道はかごらず。實に秋の夜のならひに虫の音ほのかにきこえていと〻哀を沿ふるなり。やう〳〵清水寺につき侍れど。峯子始めいかにせしか今に見えずとて待ちわびつるに。こもし火かすかに見えそめてやう〳〵着きにける頃は戌の刻過にもなり侍りぬ。今宵はみな〳〵此處にやすみぬ。

す川とかいひし渡しを越る身の
あはれにつらきうき世とぞ思ふ

さだめなきうき世の中こ思ふかな
きのふにけふはかはる旅寐に

しばちく此寺にくつろぐべしとて。母君始めみな人々髪

などゆひ直しけるに。けふは末の九日巳の刻過とも覺しく南の空はるかに煙の立のぼるよしいひのゝしる。なにの煙ぞとゞがむるに今ははや二本松に敵入込み城もあへなく落ち侍りぬこなり。女子のあさましさ涙のみ先だち行先いかにこ思ひやらるゝが。今日よりは米澤公の惠をうけ侍る可きよし聞えて。此日申の刻、清水寺を立出づ。

さきの年あづまより下りけるときはよそほひなどいさましうものしけるに引かへて。今日の旅路は皆人々あはれに淺ましげなり。折から空かきくもり道はかごらず。きりからしとかいふ所よりは坂の有て小高くなりしに。夕日もはや山のはに入りそむるころとなれば。はるかに煙の見ゆる

もふたもとのやけはべる煙かといとゞ猶なみだのみ出でつ。早くれ六ツにも成る頃村雨のふり出るに雨具なければ皆人々の哀れなる姿を見るもいと〳〵かなしうおもはれて

夕まぐれはるかになびく煙をば
　みるにつけても哀れそひつゝ
村雨のふるにつけても戀しさの
　なほまさりゆくふたもとのやど

かくいひつゝおく深き山道をゆくに家の子たちも皆々あとより追ひ來つ幼兒の泣入る聲の聞ゆるに。親だちの心をば我身に引くらべいとゞ涙のやるせなく。泊りまではなほ四里もあらむと聞くに。道はます〳〵をぐらくてともし火さへまどほなれば道いとはかどらず。戌の刻ばかりにやう〳〵李平につきぬ。家居もとより廣からねば母君はじめつきそふ人々の足さへやすめがてなり。しばしくつろぎはべらむと母君ののたまへば。自らも峯子をいだきたるまゝにて。よるのものさへなきまゝにたゞ足のみやすめつ。丑の刻ともおぼしきころ我公のいらせ給ふと聞えければ。皆おき出て待つほどもなく御身にさはらせ給ふこともなくていらせ給ひぬ。母君ともしばし御物語あり。程なう夜もあけぬれば我君には先づ出させ給ひ。母君はしばし後れて立たせ給ひぬ。

此處より程近かう、うぶがさはといふ所に關門ありて。此
には我公はじめうち揃はねば米澤公には通し侍らぬご聞く。
ほどもなく關門に來しに家の子たち多くうち群れてありし
が。あはれにのみ見えて何といはむも涙のみ出づ。待ちけ
る事は五ツ過頃よりはや午の刻にもなりなむ。皆人々も物
ほしうなりていと／＼なさけなき姿なり。母君妹君自から
はこしに打乘りけれど。つきそひ侍りける人々は道すがら
足だに休むるひまも侍らねばつらさ思ひやらる。折から風
さむく空かきくもりて村雨の降り出ければ猶さら物かなし
う。わけてをさなき子たちのいとほしう思はるゝに道さへ
はかとらずやう／＼未の刻過ぎて板屋宿こいふ所に着く。

かの所もいこさせまくてやう／＼晝飯したゝめしに。たそが
れごろ物騷しうなりて敵のおしよせむも難斗とて。人々の
聲高ういひのゝしれば心も落ちつかで夕げさへむねにとほ
り侍らず。行さきとてもおしはかられずと聞え心のうちも
いこくるしう。程へて人々靜まりしかば今宵はこゝにこゞ
まりぬ。雨もしきりにふりそゝぎて臥するとすれごいとゞ
猶ねられもやらで。さま／＼の事のみ思ひつゞけぬ。大垣
なる御二親君もはやいたう御年もかさね給ひ。みづからも
はや三そ路三にも成ぬるに。海山遠くもふかき御恩は送り
奉らましを。此たびの事聞かせ給ひなばいか斗か御心をな
やまし給ふらむ。せめては文だにおくりまゐらせなばさぞ

悦給ふらむに。きさらぎの頃よりは絶えて音づれなく。七年あとの春二本へ引越し侍りける折からも見えまゐらせざりしかば御なづかしさの明くれ忘るゝひまもなく。折々は夢に御姿の見えてはいとうれしうさま〴〵の御物語などありけるを。うつゝに見参らせむはいつの世にかと涙に袖のやるせなく。朝な夕な神佛にちかひつゝ。峯子を見るにつけても御二親君のいかにみ心をくだかせ給ふらむと世をうらみ身をもかこちつゝ泪に袖もほしかぬるに。はや夜もほの〴〵あけわたりて雨もをやみになりたり。けふは板屋峠と聞く。きのふの雨に道いとはかどらず。聞しにまさるてふ箱根の山も及ぶまじきと思はれ。あへぎ〴〵歩み行く人

の心も思ひやられて尙さらくるしうこそ。さゝやかなる人家の有りければ。人々みな喜びたちよりて茶など乞ひ得てしばし休らふ。是より四里、大澤宿といへるにて晝飯のよし。ひつじの刻過ぎ大澤宿に着き。ひる飯したゝめいそぎ立出づ。こゝより米澤へは程近しと聞きて人々いさみたつ。

米澤表へ戌の刻過る頃着きぬるが、女子なれども何となうはづかしう思はるれば。ましてをのこ子たちの心のうちいかばかりと思ひやらる。

やう〳〵此處に落着きしに此處は神明の神主ときく。今宵よりはこゝをさまりと定めやう〳〵心もやすらひぬ。とかくさま〴〵にもてなさるゝにいとうれしうなむ。母君妹

君にもちかき所に落着かせ給ふよし。是も米澤公のふかき御情によると聞く。昔しより人々の物語りにきゝけるに少しもたがはず我君はじめ家の子たちに至るまで皆殘りなく厚き惠をかけ給ひしことは千尋の海も及びなくことさらに思ひ侍りぬ。

葉月はじめの九日二人の子たちは仙臺へうつさるべしと聞くに名殘のをしまれて涙にのみくれけるに。又母君妹君には會津の方へうつり給ふとて同月の朔日米澤表を出給ふ只涙のみ先立つを又逢まゐらせむ事のみ契りつゝしばし別れの袖をしぼりぬ。

程もなく婿養子にとて頼丸君を給はりしに其御情けは中々筆に盡されず思ひしに頼丸君の方より我住む方に來給ひて悦の盃とりかはしけるうれしさよ

かくばかり厚き情けにふたもとの
まつのみどりも色をそへつゝ

今年よりいやおひしげれいく萬代
みどりをそへよふたもとのまつ

程もなう十五夜の月をながめしに。常はおもしろうながめけるをことしのみは心の澄みわたらねば

かくばかりかはり行く世ぞうらめしき
さやけき月を見るにつけても

こたびは敵會津の方に押寄せなむとすと聞き。母君妹君の御上いと〳〵心もとなく思ふに、會津より家の子の米澤表に來つるが。母君妹君には會津公と諸共に籠城ともいひ又御立ちなりしとも聞えとり〴〵の物がたりにやすからず思ひけるに。同末の三日朝まだき會津を出給へるよし報せあり。母君妹君にも御乘り物さへいとむづかしう殊に危うき御難の有けると聞え。夜すがら檜原峠とかいひけるを子の刻頃ともし火とてもなくたいまつといふ物を一ツ二ツにてこえ給ふよし。こゝの峠は板屋よりも一しほさかしくてとまりの宿もなく食ふべきものもなきよし。かくて末の九日午時ともおぼしき頃けふ母君の着かせ給ふとて人々用意あ

れば。いと〳〵うれしうみづからもゆきたう思へどもまゝならで濱女を出だしゝに。たそがれのころ母君妹君かたはらの人々まで恙なく着かせ給ひぬ。御さはやかにわたらせ給ひて聊かのみつかれもなく殊更悦び給ひしと聞き今更にもうれしうなむ

やう〳〵菊月初の八日頃二本も今ははや降參とかきこえ日野氏ふたもとへ參りしと言ひて出しに。いとうれしう程もなく歸られ侍るべしと人々打よろこぶ。

中の三日後の月見とて宿の主人より御酒さま〴〵の品給はりければ、今更に名殘も惜しまるれどふたもとのこともいと〳〵なつかしうこそ

長月の空さへいとゞすみわたり
かげもなつかしふたものやど

同き中の六日こゝを立出よとなり。母君は中の五日に米澤表を立たせ給ひ。みづからは六日辰の刻頃立出て大澤宿にやどる。こ度はいそぎ行くにも及ばじと聞えしかば今宵はうちくつろぎてとまり侍べりぬ。

七日朝立出ていたや峠をゆくにこたびは雨もふらず道すがら四方の山々谷々みなもみぢしていとうつくしう。暫しはうき事も忘るゝ斗り見渡されぬ。米澤領のもみぢ葉はふたもとのよりもまた一入にぞ染めいでける

あだゝらの山のにしきも及びなき
からくれなゐの木々のもみぢ葉

紅葉ばの木々のにしきを見わたせば
しばしはうきもわすられにけり

かくいひて行けるに李平へはゆきかねてきりからしといふ所にてはや晝飯時に成りぬれば。むさくるしきやどの有るにてしたゝめついそぎ立出て庭坂にたどりつきてとまりはべりぬ。

八日朝辰の刻庭坂を立出づ。しばし行くに櫻本といへる名主の有りて。立寄り給へといひけるまゝに立よれば。赤き飯にみ酒さま〲の品出しかば。皆人々ことさらよろこび打むれてたべ侍る風情のをかしさいはむかたなし。それ

よりほどもなくす川の渡しにかかる。こたびは昔にひきかへて板橋かけ渡したれば立のきつる時の事のみ偲びつつ眺め越えぬ。

大森にて晝飯をしたゝめ出行くに道さへ廣からねど空も殊にうららかなればかごより出てあゆみしに。かたはらの人々もわづかに四人のみなれば。折々は木かげに佇みやすらひつゝゆく。このわたり石坂のみ多く。あつさはあつし。のどさへかはきぬれども湯水をもとむべきたよりもなくて。一里餘りあゆみて申の刻やう〱水原に着く。ここには二夜とまりぬべしとなり。人々悦びてやすらひぬ。

廿一日。けふは二もとの大隣寺といふ菩提所に着きぬべしとて。いと〱うれしういさみ立つ。申の刻過ぎに着きはべりぬ。

けふはまた我住なれしふたもとに
かへり行身もあはれなりけり

都や子

明治元つちのえ辰の七月廿七日より道の記

附錄

原本もと本邸の御所藏にて未定稿のまゝなるが。その寫本の外間に存在するものまた少からず。今活版に附するに當り。十分校合を試むるの餘日なかりしは頗る遺憾なり。

原本もと題名なし。然るに此を道の記と題せしは著者が原稿末尾に附記せし文字に資りしばらく題名となすのみ。

編中に散見する人名中主要のものを丹羽家系圖等より抄錄しそ蛇足を加ふること左の如し。

我公 當時二本松十二代城主丹羽長國公。

少名保藏。五郎左衞門。越前守。従四位上。侍従。左京大夫。後正三位。天保五年甲午四月十四日産于奥州二本松。父丹羽左京大夫長富公。養母筑後久留米城主有馬中務大夫賴貴嫡上總介賴端女。生母長富公妾松尾氏某女。同七年丙申四月出府。嘉永六年癸丑四月娶戸田氏正女久子。安政五年戊午十月

別號の誤

十一日父長富公致仕。家督更名左京大夫。明治元年戊辰夏。黨與奥羽列藩。誤抗衞官軍。是以十一月被止官位。尋而收二本松城地。閉居于德川茂德邸。同二年已己九月罪解許歸隱于二本松藩。明治三十五年壬寅四月襲從四位子爵丹羽長保公後。同三十七年一月十五日薨于麻布六本木邸享年七十一。

都や子 公夫人久子號別。

正三位丹羽長國公室。濃州大垣城主戸田釆女正氏正女。嘉永元年戊申九月三日成約。同六年癸丑四月三日成婚。明治三十三年庚子一月二十五日卒。享年六十有五葬于青山墓地。

母君 長國公養母。前城主長富公室。筑後久留米城主有馬中務大夫賴貴嫡上總介賴端女。文政三年庚申四月整婚。明治六年癸酉三月二十八日卒。葬于泉岳寺。

姉君 長富公女美子。嘉永二年已酉五月廿五日產奥于州二本松。安政六年十二月約嫁于德川麾下臣一柳播磨守某嫡一太郎某未整婚姻而一太郎卒。故離緣。後明治三年四月再嫁于磐城國湯長谷藩知事内藤政憲。同十二年十二月離緣。

明治元年戊辰八月の誤

田丸氏の誤

同十七年四月再嫁華族岩城隆邦。明治二十六年七月卒。享年四十五。葬于淺草總泉寺。

五郎君 國敬。小名四郎。後改號五郎。長國公養子。安政三年丙辰正月產于江戸三河臺邸。實丹羽長貴公外孫一柳播磨守某四男。明治元年戊辰二月約爲長國公養子。同三月在京家臣呈養子願書于太政官。官速許之。時當戊辰之變。驛路混亂。音信不通東國。六月十七日未奉官許而夭。享年十有三。葬于城下大隣寺。

峯子 長國公女。母濃州大垣城主戸田釆女正氏正女。慶應元年乙丑正月五日。產于奥州二本松。明治戊八月約配于丹羽長祐公。同十五年壬午三月整婚。同十六年癸未十一月十九日卒于東京麻布六本木町一番地。葬于青山墓地享年十有九。

蓁子 長國公女。母田九氏

慶應二年三月二十八日產于奥州二本松。明治五年二月約嫁于華族稻葉正邦嫡正凝。同七年八月離緣。後爲正邦之養女。同十年癸丑六月十八日夭。

久美子 後改組子。長國公女。母田丸氏。
慶應三年丁卯九月五日產于奥州二本松。明治三十五年壬寅十一月長德公室。

賴丸君 長國公養子。十三代長裕公。
安政六年巳未三月十五日產于江戸櫻田門外邸。實出羽國米澤城主上杉彈正大弼齊憲九男。生母讃岐國高松城主松平讃岐守賴恕女。明治元年戊辰八月約爲長國公養嗣。以公長女峯子爲妻。是長國公避二本松城兵禍。携家族逃于米澤之時也。同年十二月賜二本松城五萬石。改名長裕。同十九年七月二十九日卒于麻布本邸。葬于青山墓地。享年二十有八。

濱女 老女。號濱岡。相州藤澤人。葬于大隣寺。

奥田 稱彌兵衛。奥老職。

日野 稱源太左衛門。家老職。

智觀 黑田傳太夫隱居名。

大正六年九月十五日印刷
大正六年九月十八日發行

【非賣品】

東京市麻布區六本木町一番地
著者　故　丹羽久子

東京市小石川區丸山町十九番地
發行者　小此木忠七郎

印刷者　市川保

東京市神田區中猿樂町十七番地
印刷所　中外印刷株式會社

終